



8 海野勝珉《太平楽置物》一点

明治三十二年（一八九九）銅・金・銀・四分一・赤銅／象嵌
四二・〇×二一・〇×四六・〇

舞楽のなかでも最も有名な武舞で、その装束の絢爛さでも知られる「太平楽」の演者を表す置物である。本作も顔は铸造で、装束の多くの部分が鍛造で成形されているのは前掲No.7《蘭陵王置物》と同様である。そのなかで、《蘭陵王置物》と比較して、本作の特徴として挙げられるのは、演者の顔から装束の各部分にいたるまで、写实的表現がさらに推し進められている点である。たとえば、本作では装束の各部分に金の平象嵌を多用して文様が表されているが、それは太平楽の装束の特徴を彫金技法で再現しようと写実主義を追究した結果である。同様のことは、何層にも重なり合う装束の襞にも見られ、鍛造成形により裂の質感が細部まで自然に表されている。そのように見ていると、《蘭陵王置物》は丸みを帯びた柔らかな作りと、色金を多用した高肉象嵌の手法により、どちらかというとな伝統的な彩色人形に近い性格を持っているのに対し、本作では上記の特徴に加えて人体のプロポーションにも気を配り、日本に新しく移入された西洋風彫塑への接近が図られているといえるだろう。約十年前に絶賛された《蘭陵王置物》と同じ舞楽をモチーフにして、同じ丸彫の手法を試みながら、過去の榮譽に安住することなく、進取の精神を示した海野のもう一つの代表作である。本作は後掲No.13の香川勝廣《和歌浦図額》と同じく、一九〇〇年パリ万博出品のため宮内省より明治三十年に依頼を受けて製作された。製作費は宮内省より支給されたが、作品が完成して宮内省に納入された後、実際の万博出品に際しては作者へと貸し与えられ、作者本人の名義で出品された。なお、本作と同じく宮内省の製作補助を受け、高い評価を得た同博出品作、高村光雲《山靈訶護》（木彫、当庁用度課所管）や石川光明《鷹匠置物》（牙彫、当館蔵）にも、作者の写実表現への高い意識が共通して見られ、材質や専門分野を超えて明治中期の彫刻に表れた製作傾向を示す点でも貴重な事例である。





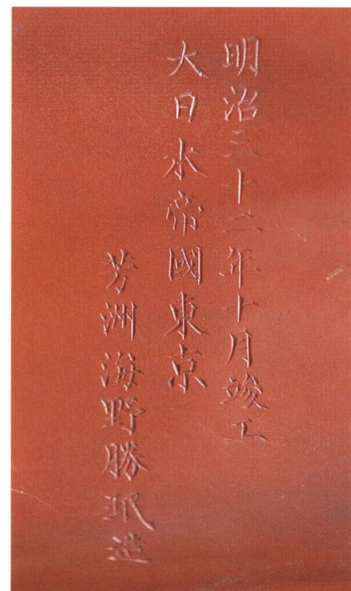




龍頭形の肩喰(かたくい)は四分一の鑄造に鍍金したもの。銀や赤銅などを象嵌して、毛彫をほどこし、眉や眼、鱗を表している。肩喰の下の黒い裂は赤銅地で、金の平象嵌で雲に龍と宝尽しの文様を表している。袍の袖は鍛造で丹念に成形して、窠文を高肉象嵌している。



鬼面形の帯喰(おびくい)も肩喰と同じく四分一の鑄造に鍍金したもの。その下に垂れる平緒は赤銅地で、桐に鳳凰文を鋤彫して表している。



裾裏の銘

明治三十二年十月竣工
大日本帝國東京
芳洲海野勝玳造

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治の彫金―海野勝珉とその周辺

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 41

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十八年九月二十三日発行

© 2006, The Museum of the Imperial Collections